

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	阿部 将伸
論文題目	存在論の解体から構築へ——初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈		

(論文内容の要旨)

マルティン・ハイデガー (1889～1976年) は、近現代を通じて顧みられることの乏しかった存在論に再び光をあて、独自の存在論を構築した。彼は存在の問いを現代において喚起することがもつ歴史的意味を不断に問いつづけた。それゆえハイデガー存在論は、伝統的存在論との対話と対決 (これをハイデガーは「解体 (Destruktion)」と称する) のただなかから構築されている。このような問題意識をもち、自らの存在論を模索していた、主著『存在と時間』(1927)の公刊に先立つ時期のハイデガーにおいては、なかでも、存在論の伝統の起源に位置するアリストテレス存在論の「解体」が焦眉の課題であった。本論文は、ハイデガーによるアリストテレス存在論の「解体」を、もっとも集中した精力的なアリストテレス解釈が行われていた1921～25年の時期に照準を当て、その時期の講義・演習録にもとづいて解明している。この解明の成果をふまえ、ハイデガーの伝統的存在論の解体とハイデガー自身の存在論構築とのあいだに密接な関係性があることが明確にされる。

とくに本論文の解明の中心はアリストテレス存在論の中心概念「ウーシアー」を初期ハイデガーがいかにか解したのかという問題である。ただ、この解明をハイデガーは方法に関する研ぎ澄まされた問題意識をもって行っているのであり、それゆえ申請者も方法の問題に細心の注意をはらいながら解明している。本論文序論は方法に関する議論にあてられる。ハイデガーは根源的な現象に対しては明示的な文言によって客観的な意味規定をあたえられるとは考えていない。そのためむしろあえて形式的で空虚な叙述をあたえることで、叙述をうけとる読者が自らその現象を生き直すようながすことを彼は試みる。ハイデガーによれば、アリストテレスもまた、このような仕方でもアリストテレス自身の根本経験を生き直すことを迫っている。そのためハイデガーは、「過剰照射 (Überhellung)」という方法をとる。これは、客観的で分析的な通常の学問的態度をとらず、一見「過剰」なままでにアリストテレスに入りこんでアリストテレスを照らし出すこと、そのためにもアリストテレスの哲学の背景にあるアリストテレスの根本経験を生き直すことを求めるものである。哲学史のなかで「ウーシアー」をはじめとするアリストテレスの諸概念は、表面的な教説内容がその背景にあるアリストテレスの根本経験から切り離され表層化されてきたが、上記のような方法によって彼の諸概念に根源性を取り戻すことが可能になる。

もっぱら上記の時期におこなわれたハイデガーの講義・演習録に依拠し、上記のような方法論的問題意識の元でハイデガーによるアリストテレスの「ウーシアー」解釈が検討される（第1～第3章）。一般的に「実体」と理解されてきた「ウーシアー」は、アリストテレスの根本経験としての「ソピアー」（ハイデガーによればこれは「本来的了解」と訳される）を離れることでその概念が平板化されていった。この時期においてハイデガーは、可能性や偶然性に関かれた存在性格を有する点で「ウーシアー」を評価しつつも、そういう存在性格を閉ざしてしまいもする点で「ウーシアー」を批判するという、二面的な態度をとっているのである。

その「批判」にあたるのがハイデガーの言う「限界確定(Ausgrenzung)」という操作である。本論文最終章である第4章はハイデガーによるアリストテレスの「限界確定」を確認する作業にあてられる。限界確定が必要なのは、アリストテレス自身が存在論を〈各実存がそのつど遂行すべき探究〉としてとらえている一方で、たんなる客観的教説としてもとらえているからである。ハイデガーはあとのとらえ方に異を唱えざるをえない。申請者によればこのようなハイデガーのアリストテレスへの態度に見られる評価と批判の二重性は、ウーシアー概念に対してのみならず、ほかのアリストテレスの諸概念に対しても確認できるものである。

申請者は、この時期のアリストテレスとの対話・対決（「解体」）がハイデガー本人の存在論を決定づけたという。というのもハイデガーは、自身の存在論を構築するに際して、アリストテレス存在論に見てとられた遂行的性格（自ら遂行すべき課題であるという性格）を一層強調することで、アリストテレス以上に存在論を可能性や偶然性へと解き放っていったからである。このことを申請者はハイデガーの議論のさまざまな箇所を確認する。

以上の考察によって、アリストテレス存在論の「解体」と、ハイデガー自身の存在論構築との正確な関係性が一貫した観点から解明されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は主著『存在と時間』(1927)公刊に先立つ時期(1921~25年)の、ハイデガーのアリストテレス解釈に焦点を当て、とりわけアリストテレスの「ウーシアー」概念について示されたハイデガーの解釈を中心にして論究したものである。

この時期のアリストテレス解釈については、全集で関連する講義・演習録が公刊されたことにより、ようやくこの10年ほどのあいだに全貌が明らかになってきた。そのため、このテーマにしぼった論考としては、本論文は先駆的な業績といってよい。この点は本論文において評価すべき第一の点である。このテーマに関する内外の二次文献については、かなり細かなものまでふくめ、最新のものに網羅的に目を通した上で書かれた論文である。むろん、アリストテレス解釈の巻にとどまらず、ハイデガーの既刊の全集、解釈元のアリストテレスを広く、綿密に追っていることは言うまでもない。

本論文において評価すべき第二の点は、透徹した方法論的意識に貫かれた研究であるという点である。本論文は序論においてまずハイデガーの方法論を分析する。ハイデガーは根源的な現象に対して明示的な文言によって客観的な意味規定をあたえることができると考えていない。そのためむしろあえて形式的で空虚な叙述をあたえることで、叙述をうけとる読者が自らその現象を生き直すようながすことを彼は試みる(「形式的告示」)。このようなハイデガーの方法的指示は、ハイデガー解釈者が第三者的な姿勢から分析を行うことを堅く拒んでいる。申請者も自らの実存をかけてハイデガーの解釈に取り組むのである。

ハイデガーによれば、アリストテレスもまた、読者に自らアリストテレス自身の根本経験を生き直すことを迫っている。そのためハイデガーは、「過剰照射(Überhellung)」という方法をとる。これは、客観的で分析的な通常の学問的態度をとらず、その意味では一見「過剰」なまでにアリストテレスに入りこんでアリストテレスを照らし出すこと、そのためにもアリストテレス哲学の背景にある彼の根本経験を生き直すことを求めるものである。ハイデガーによるアリストテレスの「過剰照射」の徹底的分析に本論文の主要部分(第1~第3章)が割かれているが、このような方法的論点の重視は、いままでの解釈者にはない、独自の解釈姿勢と評価できる。

本論文の評価点の第三は、上記のような方法論的意識にもとづいて展開される「ウーシアー」概念の新たな解釈である。申請者が上述のように「過剰照射」を重視するのは、アリストテレス解釈のハイデガー存在論の構築にとってもつ重要性を認めているからである。第1~第3章の分析を通じて、ハイデガーののちの存在論構築にいかにかアリストテレスとの対話、対決(「解体(Destruktion)」)が大きな影響をもったかということが確認される。そういう影響の第一のものは、アリストテレスが自らの哲

学を理解するに際して、読者に自らの根本経験を生きることを用ながしているという上記の基本姿勢のあたえた影響である。また、「ウーシアー」という根本概念がアリストテレスの根本経験としての「ソピアー」（ハイデガーによれば「本来的了解」と訳される）を離れることで哲学史のなかで平板化されていったという事情も明らかにされる。さらに通説ではハイデガーはこの「ウーシアー」概念を被制作性、恒常現前性にとらえなおし批判したと思われるが、申請者はこの説は『存在と時間』以後のハイデガーの姿勢の過大視にもとづく説であると指摘し、通説を退ける。むしろこの時期のハイデガーは、可能性や偶然性に開かれた存在性格を有する点で「ウーシアー」を「過剰照射」的に評価するのだという。申請者はハイデガーがアリストテレスから受け取ったのはこのような根本経験へと帰還せよといううながしであるという。

本論文は上記のような一貫し説得力のある解釈の枠組みによって、いまだ十分解明されているとはいえない、初期ハイデガーのアリストテレス解釈の試みに新たな有力な観点を提示するものである。ここで示された解釈は今後のこのテーマの研究がふまえるべき標準的解釈となりうるものと評価できる。たしかにハイデガーの解釈への批判的検討という点ではいささか物足りない感があるのは事実である。しかしながら広い学識と独創的な観点、また、自ら根本経験に目を向けることでハイデガーの思索を引き受けようとする強靱な思索によって、本論文は高い完成度に達している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成25年7月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降